

さまざまなナチス論について——批判者への批判

村 瀬 興 雄

一 拙著への批評

一九八三年一月に「ナチス統治下の民衆生活——その建前と現実——」（東大出版会）を出版したところが、はじめの間は反響がいぶかった。しかしそのうちに多くの紹介または批判がよせられるようになった。傾聴すべき貴重な批判が多かったし、もっともな誤解によるものもあったが、なかにはただの攻撃となっているものもあった。またその反対に、私見に対するきわめて好意的な紹介や評論も少なくなかった。それらのうちの若干を紹介しつつ、私の回答をのべて、ナチズム論の展開を試みたい。

私のナチズム論の中心をなしているのは、フリッツ・フィッシャーが「エリート同盟」の中で展開した論旨と、ほとんど同じであって、それを要約すればつぎの如くである。

「ナチスの行った犯罪行為は、もとより糾弾すべきである。しかし第三帝国を、ただ犯罪的・非人間的政策の遂行という側面だけから把えること、すなわち同帝国の無法性を強調し、同帝国と民主主義体制との根本的な相違だけを強調することは、歴史的眞実に対する大きな歪曲となる。大切なことは、第三帝国の基本的な性格を究明することで

ある。私は一八六六年から一九四五年にいたるドイツ（いわゆるプロイセン・ドイツ）の基本的な性格と戦争目的とは連続していたと思っている。ナチスが犯した犯罪への糾弾は、もとより必要であるが、憎悪のあまり、第二帝政から第三帝国までを貫徹するドイツの基本的特徴までを、見失ってはならない⁽¹⁾」

私見を誤解して、拙著を攻撃したのは荒井信一氏である。⁽²⁾

「……ナチスの統治がドイツの民衆生活の表層をかすめたにすぎなかったかのような（村瀬の）主張にはさまざまの反論があった。第二次大戦の加害者としてのドイツ民衆と、村瀬氏の提示した民衆像とのズレを疑う率直な発言もあったし、村瀬氏の利用した史料の限界と、史料利用上の方法的吟味にたいする疑問も述べられた。……民衆生活史という新しいジャンルの研究に固有な困難をめぐる問題」がある、と。

つぎに私見に対する批判を表明したのが西川正雄氏である。⁽³⁾

「……ナチズムについても、近年ますます多様な実態が明らかにされつつある。しかし、それが他方では木を見て森を見ない傾向を生みだしたことに注意しなくてはなるまい。

例えば、数年前、バイエルンの一寒村に関する第三帝国期当局の実状報告書がミュンヘンの現代史研究所の手で編集され公刊された。……この材料が村瀬興雄氏によって紹介されると（『ナチス統治下の民衆生活』……）民衆生活はナチ支配下でも他の議会主義諸国の場合と大差なかった、という『新しい』説が出たかのように受け取る向きが現われた。……議会民主主義とナチ体制との間の……大きな違いこそ忘れてはなるまい。年長者は、戦後世代に、ナチズムとは何であったのか、その本質的局面を具体的に説明しなくてはならない」

なぜ組織的な大量殺人が行われたのか？ それは「全体が狂っているのだ」「ナチスが決して許されることのない一つの理由は、彼らの妄想に基づく罪過」のためなのだ、と氏は『アウシュヴィッツの少女』（時事通信社）の著者

キティ・ハートの口を通じて説明する。そして「こうした告発を無視するならば、ナチズムを論じたことにならない」と指摘する。

一九八三年七月二日から二三日にかけて、山梨県増富温泉において、歴史学研究会の第一四回現代史サマーセミナーが行われた。そこで行われた四つの集会の一つが、拙著に対する合評会であった。私は招かれておらず、芝健介氏の適切な拙著紹介に続いて、歴研の有力メンバーから拙著に対する批評や疑問がのべられたのである。⁽⁴⁾

「荒井信一氏が、引用されなかった史料やバイエルンの特殊性の問題に加え、フューラー崇拜というが、ファシズム運動のダイナミズムの熱狂を恒常的に組織するのは困難であるから、ナチズム→ヒトラー主義という進路はむしろ当然ではないか、また人種主義、反セム主義をドイツだけでなくヨーロッパ全体の問題としてとられるべきではないかと指摘した。……」

「内田健二氏が小ヒトラーの存在如何を質した……」

「藤原彰氏は、民衆の生活が変わらなかったというだけではナチスの蛮行を説明できないとし、木坂順一郎氏は、空襲等でようやく民衆がその問題性に気付くような支配機構がいかにして形成されたかが問題であると指摘……」
（この木坂氏の言葉の意味については「ナチスのお先棒をかついだ、あるいは端役をつとめた民衆の側面、すなわち、いつのまにかナチスになり、いつのまにかナチスでなくなった民衆の側面を明らかにすべきだ、」という意味でもあるという、参加者からの個人的説明をうけた）。

以上は従来の定説に立脚しつつ、「定説」を批判した私見を批判したものであるが、次にのべる阪野智一氏の批判も、基本的には同じ系列に入れるべきであろう。⁽⁵⁾

「ナチス体制と『正常な』議会的官僚制との差は、『世上でいわれているほど大きくない』と主張するのは、性急な

議論ではなからうか。というのも、ファシズム体制の成立が、正統性原理、政策決定のメカニズム、国家による社会の編成化の在り方、等における根本的な体制転換であることを見失いかねないからである。……民衆史へのアプローチが、政治体制やその経済的基盤への視点を欠いたまま日常生活への沈潜を深めて行くならば、逆の意味での一面性を免れえまい。……底辺での民衆の世界とそれを包む政治経済構造とを繋ぐ理論的枠組みの工夫が必要とされてこよう。」

以上の批判のほかに、専門家による詳しい拙著の紹介とその上に立つ批判もあらわれた。原田一美氏の書評がそのうちでは力作である。⁽⁶⁾

「ナチス研究における民衆生活研究の位置づけについて、もう少し詳しく紹介していただきたかった……」

「ドイツ労働戦線は……農村近代化の要求を提示したというが、実際にはどの程度具体化されたのかは明らかではない……」

「ヒトラー・ユーゲントなどによる青少年の校外教育活動が、保守的・家父長的で弊害の多い地域社会関係の改革に寄与したと（村瀬は）いう……しかし青少年が教会や家父長から『解放』されてどうなったのか……。」

「教会闘争の場合も同様である。学校教育は、教会による支配をまぬがれてどうなったのか……。」

「体制全体の性格や近代化の目的を抜きにして、個々の近代化現象だけを取り出して強調することには問題がある……。」

「第三帝国と他の『正常な』諸体制との……本質的な相違を忘れてはならない……」

山口定氏はすでに「聖教新聞」で拙著にふれている。⁽⁷⁾ 同紙上では私が、「当時の民衆の『しぶとく、いきいきとし

た生活態度』や『イデオロギーにとらわれない実利的生活態度』を強調している。それと同時に、いわゆる『全体主義体制』といえども、その支配にはおのずから限界があり、民衆生活に対する完全なコントロールは不可能であったと指摘」している点が拙著の特色だ、と氏は論じている。

しかし氏は「週刊ポスト」では別の形の批判を展開した。⁽⁸⁾

「著者が前提とするような単純なヒトラー像が『通説』として通用していたのに、二十年も前のことであろうし、著者のあげる数々の証拠こそがヒトラーの『カリスマ支配』の歴史的内容そのものなのである。また、ナチ流の反ユダヤ主義への民衆の拒否が、そのまま民衆レベルでの人種的偏見の不在を意味するものでもないであろう」と氏はいつている。

つぎに拙著の内容に対する肯定的理解に立った注文には以下の数例がある。

栗原優⁽⁹⁾氏。

「著者がヒトラーの民主主義破壊や戦争政策を『業績』と認めているわけではないだろうし、また、数百万のユダヤ人虐殺を忘れたわけでも、政党・労組の破壊を『表面的』とみているわけでもあるまい……。

『著者の意識にあるのは……ヒトラーの政策が具体的な利益をもたらすかぎりにおいて、これを受け入れ、反ユダヤ主義や画一化が彼ら「民衆」の利益に無縁であったり抵触するかぎりにおいて、これを表面的なものにしてしまう民衆のしたたかで現実主義的な生き方なのである……。」

「本書はまさに民衆生活と政治との接点を問題とし（ている）……」

「民衆生活を、いわば丸ごと肯定して、そこからナチズム解釈をおこなおうとするとき、そこにある種の問題性が

含まれてくる……」

木村靖二氏も、肯定的に評価したあとで、つぎのように云っている。⁽¹⁰⁾

「ナチス対民衆という二元的図式が前面に出され過ぎる感もあり、また、村落・労働者世界などの伝統的生活の内容が断片的にしか明らかにされていい点などに不満もある……」

「著者の視点が西独を中心とする欧米歴史学の動向や成果に規定され過ぎているという問題が残っている……」
本学の石塚正英氏もつぎのような注目すべき問題を提出している。⁽¹¹⁾

「西ドイツは、日本とともにアメリカに次ぐ強力な資本主義国家、みる人によっては帝国主義的な再生を果たしたサミット国家、に成長した……『ドイツ帝国主義を継承してそれを発展させる』べき国家として西ドイツを評価してもおかしくない」が著者はむしろ第三帝国と西ドイツと間の断絶を重視している点に不満がある。

「著者の次の言葉……『共産主義とファシズムと民主主義との関係については、……相互に移行することの可能な三角形の三頂点と考える……』……はいかに解釈すべきか。三者のどれをとってみても権威主義あり、独裁的傾向あり、という意味か……どのような政治的・社会的指導理念も必ず通俗化し、大衆運動の中では区別項を失いがちだ、という意味か……」

岩淵達治氏は拙著を紹介して『生活の知恵』だけによって動く民衆の日常生活』と云っている。⁽¹²⁾

清水多吉氏はすでに無署名書評で拙著に対してあたたかい評価をしているが、さらに「毎日新聞」紙上で、スターン『ヒトラー神話の誕生』（社会思想社）と曾良中清司『権威主義的人間』（有斐閣）とともに、拙著を署名入り書評でつぎのように紹介し批評した。⁽¹³⁾

「時の流れは、『ナチズム』研究の視角に冷静な客観性と、地方史におよぶ詳細な分析をもたらすことになった。昨

今の研究は……ナチスがやはりある種の社会革命を遂行したのであり、いわば近代化を推進したのではないか、という方向に向っている。……

「〔村瀬〕の本は、地方農村部において、ナチスがいかに教会や名望家層の抵抗にあい、画一化政策をさまざまげられてきたかを、綿密に論証する。このことを逆に云うなら、ナチスは伝統的名望家層とは別次元の支持基盤をもっていたために、彼らを圧迫し、近代化に向けて強権をふるうことが出来たのだ、ということである。社会史的にみた近代化論が〔村瀬〕の本である……」

「ナチス問題は、近代西欧の深い恥部に根ざすものであろう。……戦後の近代化、社会的公正化などの諸改革を考えるにあたって、ナチスは優れた負の教師の役割を果たしてくれている。……」

二 著者からの批評と弁明

私見は、拙著の中でも明記しているように、従来の定説を全面的に否定したものではない。それに一定の修正を加えたものにすぎない。また体系的なファシズム論を新しく構築することも私は考えていなかった。ただ画一化や一党独裁の不徹底、カリスマ支配や人種論的反ユダヤ主義などの民衆に対する貫徹力の意外な弱さなど、若干のテーゼを提出したものである。そしてかかる「不徹底」や「弱さ」の原因として、民衆の実利主義、生活と習慣を擁護するためのしたたかな生活態度、そのような民衆とドイツ支配勢力そのものの利己心とを前した場合のナチス党の弱さ、多元的なドイツ社会の連続性、建前と現実との巨大な分離、などの点をあげたものである。

(一) 荒井氏に対して。私はナチスの統治が「民衆生活の表層をかすめたにすぎない」などとはいっていないし、そのようなことを考えてもいない。拙著第二章、第三章を読めば、そのなかで、都市と農村の民衆生活が、どのように

ナチス独裁によって変わらざるをえなかったかが、具体的に示されている。ただ私はナチスがドイツの社会を根本的に変革することはできなかったし、彼らはそのような意図をもってもいなかった。変化はドイツ社会の基本的な性格の連続性という枠の内でのみ行われた、と指摘しているのである。⁽¹⁴⁾ ナチス幹部のなかでも、人種論を主張する連中は、建前の上では支配層内部の人員の入れ替えと、民衆生活の変革と民族共同体の実現とを企図していた。しかし民衆と既成支配勢力の、現実生活に根ざす抵抗に直面して、そしてナチス党内部の不統一と各種の政策の相互矛盾と便宜主義とのために、建前と現実との間には大きな相違が生まれてきた——ということを私は強調した。ナチス党自身が、下部組織になると、各地方それぞれに性格と利害を異にする集団となっていて、上層部の意向通りには動くことができなかった。党の下部組織と上部組織の間の不和や対立も方々でおこっていた。したがって、ナチス党の統制力は実際においては表面的なものであり、第三帝国の社会が、指導者原理の貫徹する、そして服従と偏見と狂信とが末端にいたるまで支配する、沈黙と狂気と無気力の地獄のような世界となるようなことはなかった。私が第三帝国と一般の「平常な」社会との相違が、「通説」ほどではなかったというのは以上の理由からであり、これこそ歴史家が注目しなければならぬ厳然たる事実である。荒井氏は私見を理解できなかった上に、第三帝国の実状を知らないために、定説に立脚して拙著批判をしているのである。

つぎに「加害者」としてのドイツ民衆について。

独裁制のもとに住む民衆が、国外に出征したときに残虐行為を行いがちなことは、ヴェトナム戦争に派遣された韓国兵の行動からみても明らかである。しかしドイツ民衆がどの程度まで（残虐行為の源泉となるところの）フラストレーションのかたまりであったかは、ナチズムについての「定説」が支持できなくなった以上、あらためて、確定しなければならぬ。私は第三帝国下の一般民衆がいだいていた不平不満は、西ヨーロッパ各国一般の民衆と比べた場

合に、定説で説かれるほど大きく違っている。したがって残虐行為へのドイツ民衆の積極的な加担の程度を自信をもって指摘することはできない。民主主義国家の兵士たちもまたどれ位残虐になりうるかは、アルジェリア戦争やヴェトナム戦争の例がはっきりと示している。私はナチス独裁とドイツ兵士の残虐行為とを短絡してきた「定説」を考え直す必要を感じている。ナチスの残虐行為は、軍部、官僚、経済界、知識人を含むドイツ支配勢力主流の政策でもあった。SSの特殊部隊が虐殺をして廻ったことは周知のごとくである。しかしドイツの一般民衆も兵士は、このような蛮行に対して不同調の態度を、示したものと私は思うが。

要するに国内体制と兵士の残虐行動とを直結する思考法を私個人は反省している。その時々、住民と占領軍兵士との関係、上層部の政策と末端部におけるその実施状況、兵士の具体的な心理状態などの問題をさらに追求すべきであらう。フランスにおけるドイツ軍兵士と一般フランス人との関係も、定説ほどには悪くなかった。⁽¹⁵⁾

つぎに「史料の限界」について。

警察文書、公安関係文書、その他各種官庁文書のみを拙著が利用している点に確かに問題はある。しかし、系統と由来を異にするいろいろな文書、たとえば軍部、職業紹介所、労働戦線、農業生産者団、教員組合などの文書も本書で利用しているのであるから、ゲシュタポ文書のみによる研究よりも遙かに客観性をもっているし、多面的である。公安―官庁関係文書が一面性をもっていることは当然であるが、史料の豊富な残存状態からみて、これらの文書が示す史実はいくら割引して評価してみても「定説」の修正を、不可避にしていることは確実であると私は考える。

また第七章、第八章を除いて、バイエルン史料だけを利用していることは史料の偏りを示してはいるが、バイエルン州のなかにはフランケン、シュワールベンなどの地方が含まれていることを無視してはならない。このうちフランケン地方は中部ドイツ的特色を、シュワールベン地方は西南ドイツ的特色をもっている地方であって、ただ固有のバイエ

ルン地方だけが東南ドイツ的・オーストリア的特色をもっているにすぎない。拙著は特定寒村ではなしにバイエルンの三地方にわたる史料に立脚しているのであるから、ドイツの広い地方の特色を反映した史料に立脚している。

(二) 以下、テーマ別に問題を整理して考えたい。

(A) 拙著は「ナチスによる近代化政策に注目して、この政策によって教會的、家父長的、伝統的權威が弱体化したと主張しているが、」その結果、なにが起ったか？ 要するに民衆はナチスによる直接の統制をうけることとなり、解放も自由も近代化も表面的に終って実際にはナチス支配の強化が行われたにすぎなかったのではないか？ という批判が何人かによって提起されている。

これは鋭い、そして正当な疑問である。

しかし史料の上からみると私見の方が正しい。拙者の中のいろいろな史料が示しているように、伝統的束縛が弛んだあとでは、混乱と放埒、そして一種の自由が支配していた。ガキ大将たちは少年でありながら煙草をすったし、ヒトラー・ユーゲントに集まる青少年たちは、グループ指導者の云うことをきこうとしない腕白たちであった。男女の自由な交際も、風俗の混乱を生むなど、ここでも建前と現実とは一致していなかった。ナチス党の政治的強制力が民衆生活を統制するほどの実力をもたなかったことは、最近の西ドイツにおける調査研究からも明らかになっている。⁽¹⁶⁾以下にみるように、大衆社会現象が深刻化して、民衆は政治に無関心となり、個人生活へと退却していた。

たとえばニートハンマー編の、ルール地方の住民に対する調査記録によれば、⁽¹⁷⁾年輩の労働者、使用人、主婦などナチス時代体験者にとっては、第三帝国時代は、一九二〇年代に比べれば「正常な」、我慢のできる、以前よりもまし

な時代であった、と考えられている。この時代には自分らにはいつも仕事を与えられていたし、家族関係も正常であった。余暇を楽しむ新しい可能性が生まれたし、いろいろな消費物資の購入や利用も可能になった。怒りや不安の感情をいだくことは以前よりも少なかった。なぜならば当時は個々人の業績が尊重されたし、余暇本位の生活ができた。人びとは、家族本位の生活へと退却した。教会や旧式な労働者環境による伝統的な束縛が弛んで民衆の行動様式はより自由になった。要するに民衆の日常生活とナチス政治との間には巨大な間隙が生まれ、民衆の日常生活は政治とはほとんど無関係な形となった。このようにのべて、この調査は、ナチス統治の実状についての定説を打破している。ニートハンマーはさらに、伝統的権威が打破された後の民衆の動向のなかに、ワイマル共和制期までの民衆の思想や行動様式に対する変化があらわれ、むしろ一九五〇年代の西ドイツへと連結する、さまざまな傾向が新しく生まれていることをのべている。これは最近の研究の新しい着眼点である。

つぎにポイケルトによるナチス治下の日常生活史が、同じような現象を、さらに鋭く指摘している。⁽¹⁸⁾彼は「悪いファシストとよい反ファシスト」という画一的なナチス理解が支持できなくなったことをのべて、ナチスに対する「道徳的な憤激の時代は去ったようだ」、これまでの全体主義概念は修正される必要があり、ナチス期の民衆生活においては「多層性」がじつに巨大な規模に達していた、といっている。

なるほどナチス体制は民衆に対して強大な圧力をかけていた。しかし、それにもかかわらず、ナチスに対して非同調 non-konform な態度をとりうる可能性も、じつに広大な領域にわたって存在した。もともと、これは抵抗とは無関係な非同調なのであったが、全体主義的な体制は、「大体のところ」fast 形成されていたにすぎず、決してガッチリとは形成されていなかった。これまで一般民衆が相互に連帯し抵抗するための基礎となった環境（たとえば労働者文化圏）は弱められたり破壊されたりした。しかし、がっちりとした民族共同体がその代りに生まれたわけではな

い。民衆は個人化され、アトム化され、個人生活へと退却した。「ユダヤ人」、「民族の敵」「政治的反対派」に対する第三帝国の無制限な暴力行使が行われていたにもかかわらず、広汎な大多数の民衆は、日常生活の上で、ナチスの把握統制をほとんどうけていなかった。ナチスは一般民衆をたえず政治的に動員したが、しかし民衆の日常生活を政治化することはできなかった。広汎な、名もない民衆たちは、日常生活を非政治的なものとして感じていた。

最近の研究が示すように、ナチスはドイツ社会に褐色革命を起こすことはできず、ただ社会的諸関係の近代化を行っただけであった。または近代化を促進するための刺激を与えたにすぎなかった。すなわち、ナチス支配のもとで、民衆生活の地方割拠性が打破された。古い権威や束縛は弱体化され、個人の業績本位という原則が貫徹された。民衆の各階層は地域的制限を越えた余暇の消費方法を体得し、消費生活における地方的制約が打破された。

要するにアトム化された大衆社会の発展、大衆消費と官僚的強制によって外見上は統合された大衆社会の拡大が、この時代にすすんだとみるべきであろう。ドイツではこの時代に「近代化そのものがもつ病理」が一般化した。そしてかかる傾向が一九五〇年代へと継承されるのである。

ポイケルトは以上のように云っている。彼もまたニートハンマーとともに、ナチス期の間に、一九五〇年へと連続する、さまざまな傾向が発生し発展していることを見逃していない。

要するにナチス統治が伝統的権威を打破した後には、ナチスの直接的統治による息のつまりそうな統制が現われたわけではなくて、近代的大衆社会現象の深刻化、政治と日常生活の分離、民衆の非政治化・個人生活への退却が現われたのであった。これはナチスによる厳格な統制と民衆把握とを妨げた現象なのである。

以上のべたように、ナチスは民衆生活の隅々にまでを支配するほどの実力をもっていなかった。私の批判者はナチス党の実力を過大評価している。ナチス体制なるものは、いろいろな権力集団、圧力集団、利益集団の集合体であっ

て、定説で説かれるほど整然とした実体を（建前の上ではなくて現実には）具えてはいなかった。とくに近代化政策については、それが諸集団の政策と要求の競合・対立・妥協の間から生まれたものであって、支配者の整然とした計画や目的に従って、体制を強化させるために計画的に遂行されたものではない、かなり便宜的な政策の産物ではなかったかと私は思っている。すなわち、教員同盟、ヒトラー・ユーゲントなどの下部組織が、首脳部の意向に逆う形で「近代化」を行ったようにみえる。教員同盟による宗教教育放棄運動などもその一例であって、教員同盟はナチス党首脳部の反対を押し切って、政策を強行したのであった。⁽¹⁹⁾そしてこれらの下級諸組織の動きや、大衆社会現象の民衆生活のなかにおける深刻化が、一九五〇年代へと通ずる新しい動向を第三帝国の内部に形成していったのである。

ナチスの統制力が民衆の日常生活にまで及ばなかった実例は文化統制についても認められる。⁽²⁰⁾文化統制はユダヤ人追放や政治的反対派の追放とともにナチスの統制がもっとも徹底した分野であった筈である。しかし現実には、民衆の多数を自己の陣営にひきつけておくために、ナチスはここにおいても政治から自由な文化領域を広汎に残しておくざるをえなかった。そして有能で若い無名の文化人たちが、ヒトラー支配を直接には攻撃しない形で、それなりに高度の、そして自由な芸術活動を展開していた。

シェーファーは第三帝国時代の若い世代がナチス的でない文学活動をどのようにして営み続けたかを具体的にのべている。⁽²¹⁾

「第三帝国は、一般住民を自分らの側に長期間にわたって獲得し続けるために、政治から自由な領域を拡張していく必要に迫られた。したがって無名な作家たちの出版活動を推進しなければならなかったが、この作家たちたるやナチス的芸術観から、部分的には明瞭に離反していたのである。この作家たちは、イデオロギー的にはナチスに反対で

あったが、第三帝国の政治体制を批判し攻撃することはしていなかった。この派の芸術家たちが同じ世代の者たちの広汎な支持を得ていたのである。

「この派の人びとの精神状態は分裂していた。即ち一方では政治体制に対して黙って順応していたが、精神的には個人主義者であり、共同体本位の思想に反対であった。彼らはワイマル共和制に対して失望していたので第三帝国の成立や発展に反対はしなかったが、ナチス体制下のテロル行動には恥と屈辱とを感じており、同体制に対して好意を懷いておらず、祝祭日にもハーケンクロイツ旗を掲げず、ナチス御自慢の冬季救済事業にも献金せず、外国放送を好んで聞き、ユダヤ人に街頭で会えば握手もした。ただ積極的な抵抗は行わずに自分自身の内面にとじこもっていたのである。したがって政治問題についての討論には全く参加せず、非政治的態度を貫きながらも、人間的な感情を維持しようとした。

「多くの学者たち、たとえばエルンスト・ローベルト・クルティウス、マクス・コンメレル、カール・フォスラーなどのもとで学んだ学生たちも、これらの学者を囲む雰囲気がヨーロッパ精神の活発な伝統そのものであり、保守的な傾向には立ちながらも、民族を超越した人間的輝きにみちたものであることを知って、その影響をうけていた。しかも学者や文化人たちは、ドイツだけにとじこもっておらずに、長い年月に亘って外国に滞在することを許されていた。多くの文化人はイタリアに滞在して、そこでナチス・ドイツには存在していない近代的な諸潮流に接触した。彼らは反ナチス派亡命者たちとの接触は避けた。ナチス当局からみれば、これらの連中の『あかぬけした主観主義』は『墮落した、民族にとって有害な』傾向に違いなかったが、しかし、ナチス文化政策の大局に立ってみれば、これらの連中の非政治主義は、マルクス主義者の抵抗運動よりは遙かに無害であった。したがって政府がこの連中を弾圧することはなかったし、彼らの文筆活動に妨害を加えることもしなかった。

「この時代に有名であった著述家や作家たちは、あとになるとこの時代に発表した著作や作品をかくしたり、検閲になやまされたので自由に書けなかったことを誇張してのべたりしているが、なかにはヨアヒム・ギンターのごとくに、『全体としてみればわれわれは内心では、現在、外見上から推察されているほど息苦しかったわけではなかった』と正直に告白しているものもある。ナチスでない出版物の出版や評論だけを行っていた出版社も、ベック、ゴーフエルツ、ラウフ、S・フィッシャー、ズールカンフなど多かったし、有名な雑誌、ノイエ・ルントschau、オイローペーイッシェ・レヴュー、ドイチェ・ルントschau、リテラトゥール、また宗派的機関紙としてホッホラント、エッカルトなどが非ナチスの作家に活動の場を提供していた。著名な新聞紙の学芸欄の多くも近代精神の伝統を引続いて維持していた（ベルリンナー・ターゲブラット、フランクフルター・ツァイトウング、ケルニッシェ・ツァイトウング、ドイチェ・アルゲマイネ・ツァイトウング……）

「非政治的、しかし非ナチスの新人もまた文壇にたえず登場して、戦争の最後の年にいたるまで文壇活動を展開していたし、ギンター・アイヒの戦後の詩集 *Abgelegene Gefühle* (1948) も戦争中に執筆されたもので、部分的には当時の新聞や雑誌に発表されていたものであった。アイヒが検閲で苦しんだ形跡はない。彼自身は、『自分の作品は戦争中はまるで注目されなかった』と云っているが、これは誤りである。彼の戯曲 *Tot an den Händen* は、一九三八年から翌年にかけて、もっとも評判のよい放送劇として聴取者に選ばれていたし、その他多くの非ナチスの作家の作品が評判になっていた。アイヒの物語『カタリーナ』は野線郵便版として弘布され、一九四五年にも九〇〇〇部が刷られた。この時代もっともよく読まれた作家は、ヴィーヒェルト（二〇〇万部）、ヘッセ（四八万部あまり）、そしてファラダ（多分ヘッセ以上によまれた）であった。非政治的非ナチスの文化人たちの相互交流状態は一九三九年、すなわち戦争がはじまるまでは、良好であった。彼らはお互いに知り合っていたし、認め合っていた。戦争がは

じまるまで、ベルリンには一九二〇年代の文化の輝きが残っていた。酒場やナイトクラブではジャズ音楽が演奏され、以上のような連中が集まった。作家のみならず多くの出版人が集まって『残された自由』を楽しんだのである。文化人たちは、ナチスの統治下にあつて、いままでも以上に親しく結び合うようになった。個人的な親しい交際がふえ、いろいろなグループの間の垣根がなくなり、ナチス的でありたくない者たちの間に、情報伝達といろいろな交換が盛んになった」

「ナチスによって書物は焼かれ、禁書目録も公表されたが、その影響をうけたのは公共図書館だけのことで、実際の売買に際しては、店頭に陳列されている書物までが没収されることはなかった。スイスやオーストリアを経由して外国の書物や外国で出版されたドイツ語の書物が自由に輸入されていたし、イギリス、フランス、アメリカなどの書物はとくに数多く輸入されて、ひろく読まれた。外国書の翻訳もひろく行われて、その翻訳がまた広汎に流布した。ナチス時代にドイツと外国との近代文化の交流が絶えたことなどはなかった。ただヒトラー体制に対する直接の批判を行った書物は輸入できなかった。ユダヤ系作家の作品ですらも、いつも禁止されていたわけではない。」（たとえば、アンドレ・マルローなど）。

文学よりも、さらにイデオロギーと現実との間が大きく相違していたのは、音楽、絵画、映画、娯楽、趣味そして民衆の生活文化である。⁽²²⁾ すみからすみまで組織され、そして完全に機能している支配体制という画一的な理解は、ナチス期の文化についてはあてはまらない。半官的な機関と党機関、それに官僚機構との間には、対立や競争があつて、生活や社会の画一化政策を破綻させていた。現在の西ドイツや東ドイツにおいては、ナチス期の全体主義体制を、自分らの「自由な民主主義」や「社会主義の平和な建設政策」と対比させるために、必要以上に暗く描いている

が、これは現在の東西両ドイツにおける支配体制を、正当化するための文化政策なのである。また多数のドイツ国民が、国内の少数派に対して迫害を加え、ナチスに協力していた事の責任を免除してもらうために必要とされるナチス糾弾の立場なのである。多くのドイツ国民は、ゲシュタポに逮捕される危険など、現実には感じていなかったし、国民生活は戦争がはじまるまで、以前と比べて基本的には変化してはいなかった。

指導者国家は民衆に対して非政治的な領域、または国家的統制から自由な領域を保証していた。そしてドイツ国民は、人種的なナチス・イデオロギーからの影響など、ほとんど受けないで自己流に考えたり感じたりしていた。そして、これまで見落されてきたことであるが、当時の民衆の理想としていたものが、現在の東西両ドイツの民衆の理想としているものと、非常に類似していた。この点はとくに注目せねばならないであろう。消費物資や娯楽物資への傾倒、アメリカニズム礼賛などの現象は、民衆がナチス精神やナチス国家にどのように無縁な存在であったかをよく示している。

ドイツの労働者は伝統的に権威主義的観念をもっており、生活と地位の安定を求めてナチスを容認したのであるから、生活水準の向上するナチス体制下においては、抵抗に走る気持をほとんどもっていなかった。ドイツ社会民主党の非合法情報誌 *Deutschland-Berichte* に集められた各情報は、とくに一九三四年の春くらい、ドイツの労働者がますますナチス独裁制支持へと傾いていく有様を思ひやり深く記録している。そして一九三七年三月のベルリンからの報告は、もはや一般に抵抗への意志などは存在していないし、労働者がとくにナチスに対して従順な態度を示している、とのべている。しかし戦争が切迫してきた一九三八年四月五月の同報告によれば、労働者の気分は分裂しており、一部の者は実質賃銀の向上にもなつて、自分らの地位が安定したものと考えていたが、他の者たちは非常に意気消沈しており、同年一一月の同報告によれば、彼らは一般にあきらめと運命主義におちいっていた。

ナチス期の労働者の実質賃金は、一九二八年とほぼ同水準に達しており、時間外手当を加算すれば、ワイマル期よりも若干増加していた。そしてこのことが、深刻な経済恐慌を体験したあとでは、労働者をナチス体制に結びつける原因となっていた。一九三〇年代末の軍需景気が、一部の労働者に「個人的な業績本位で生活を改善した方が、労働組合的な利益代表によって生活を守るよりも得だ。階級闘争ではダメだ」という考えをうえつけていた。労働力が不足し、一九三九年になると二〇万人の外国人労働者が投入されるほどとなったので、一般の社会的心理は、西ドイツにおけるアデナウアー統治下の経済的繁栄期に近い様相を呈してきた。

国家による象徴的な報酬、工業からの特別贈与、それに歓喜力行団の旅行や各種の催し、などが労働者とナチス国家とを結びつけた。一九三八年には労働者の三人に一人は、歓喜力行団の休暇旅行に参加した。第三帝国の政府は労働者の「市民」への向上の熱望を巧妙にかき立てた。たとえばミュンヘンの同団事務所は、毎週のプログラムの中に、休暇旅行と並んで劇場やコンサート訪問、乗馬、ヨット、テニス、スキーなどのコースを準備した。これらの娯楽は、以前はただ上層階級だけが楽しんでいたのである。各種の講演の催しにおいても、政治問題は避けて、ヨットによる大西洋横断、ガンについて、カラー写真、中国人の知恵、手こずらせる子供、インカ文明についての新しい研究、などが選ばれていた。

第三帝国においては、社会的に上層の階層へ昇進できる可能性が、ワイマル共和制期よりも大きかった。一九三九年までの六年間に、第三帝国において、ワイマル期の最後の六年間よりも、二倍の者が社会的に昇進していた。国家の官僚組織や私経済の諸連合団体の中には、労働者層の出身者が百万人も吸収されていた。第二帝政の末期やワイマル共和制末期に比べると、第三帝国の末期には労働者がずっと密接にドイツの一般社会に結びつけられていた。戦争中における国民的な統合融和がとくに著しかった。労働者層は地位が安定し、昇進のチャンスにめぐまれていたため

に独裁制を支持したのである。

一方中産階級や上流階級は広汎な消費物資の生産と供給にひきつけられた。軍需景気によって懐具合がよかったで、自分の家屋の購入、キャンピングカー、ラジオ、テレビ、カメラ、台所用品、洗剤、衛生用品、化粧品などに彼らは熱中した。彼らの意識は一九二〇年代やアデナウアー時代そっくりであった。これらの品物の宣伝は、ナチス的感情に訴える場合もあれば、個人的な願望に訴える場合もあった。

たとえばラジオ受信機の宣伝には、「ドイツはニュールンベルク（ナチス党大会）へと行進する！ その体験を共にせよ！ ラジオ聴取者となりたまえ」というのもあれば、多数の群集の頭の上に、魅力的な民衆用ラジオ受信機が浮んでいるのもあり、また高級なラジオ受信機（二五六マルク）の宣伝ポスターには、上品な紳士が部屋の中だけで一人、煙草をくゆらせながら、受信機を前にしてゆったりとくつろいで耳をすませている構図もあった。

「コカコーラ」はドイツにおいては民族的国家主義的理念とは競合関係に立つ飲料であったが、一九二九年にエッセンにドイツの会社が建てられた後、軍需景気の中で爆発的に売行きを増大した。そのビン詰め工場は、一九三四年に五、一九三九年には五〇を数えた（一九七九年には一〇五）。その卸売商会は一九三四年に一二〇、一九三九年に二〇〇〇。コカコーラの広告には、クロースアップされた笑顔が描かれていた。人びとに温かい印象を与えるポスターがその特色で、非政治的な感情に訴えていた。「これは全く特別な飲物だ——ときどき休息が必要となる。（その時には）冷たいコカコーラが最上だ」というような。……しかし統合幕僚司令部発行の雑誌 *Die Weltmacht* に、一九三八年一〇月後半、すなわちズデーテン地方併合が祝われていた時に、広告をのせた際には、世界地図を前にして、コカコーラのビンをもつ手が高く掲げられた図が描かれていた。「そうだ！ コカコーラには世界的名声がある」全世界の四千万人のドライバーは「いつも最高度の注意力と、もっとも鋭い緊張とを要求されている」ゆえに彼らは「冷

たいコカコーラによるさわやかな休息」を大切にしている、という文句がそえられていたが、これはドイツの兵士に向けた広告なのである。コカコーラは第三帝国時代に、急速に販路を拡張して、もっともポピュラーな飲料となった。

戦後西ドイツの繁栄期とナチス時代とを結びつけるもう一つの商品はフォルクスワーゲンである。ナチスは一九四〇年に一〇万台以上のフォルクスワーゲン車を市場に売り出すと約束したが（一九三九年七月二日、ドイチュ・アルゲマイネ・ツァイトゥング）、戦争がはじまって、その約束は守られなかった。ヒトラーはこの車の製作と普及にとくに熱心であった。彼は一九三六年の自動車展示会の折に、国民が買い易い自動車の製作を要求した。「ドイツ国民はアメリカ国民と全く同じ要求をもっている」と彼はいった。

流線形の車体を提案したのも彼である。一九三八年秋の見本市にはミュンヘンとウィーンで同車の展示が行われ、一九四〇年一月までに三〇万人の購入希望者が、購入のための積立金証書を手に入れた。ヒトラーは昔からドイツにおける自動車の普及をナチス政策の目標としていたので、自動車展示会は毎年行われる一種の祭典となり、とくに青年たちに喜ばれていた。特別列車や大型バスが多数の見物客をベルリンへと運んだし、新聞が写真によって展示会の内容を詳しく紹介した。おもちゃ屋でも走る自動車に人気が集まり、人々は陳列窓をみながら「タンク、カタピラトラクター、オートバイ、ジープ、貨物自動車、總統の黒い自動車」などを識別した。一九三五年の自動車展示会の際に「自動車は總統と共に、總統によって、ドイツで大衆的となった」といわれたが、これは誇張した表現ではなかった。この時代にドイツの自動車所有者数はイギリスよりも急速に増大したが、しかしアメリカには遙かに及ばなかった。近代的消費社会という点でドイツはアメリカに及ばなかったのである。

ドイツの場合には、政府によって推進された期待、即ち近代的消費社会への期待が大きかった。各種の自動車の値

下げも行われて、(オペルP4、一六五〇マルクから一四五〇マルクへなど)、経済界はヒトラーの指導下に自動車購買者層の拡大を目指していた。

ナチス自動車運転者団の機関誌 *Deutsche Kraftpost* には準軍事的な印象を与える記事や写真が掲載されていたが、ドイツ自動車クラブの機関誌 *Motorwelt* の方にはアメリカ流の記事や写真が多かった。自動車による田園への家族ピクニック、のびやかな休息や団らんと食事などがそれである。一九三〇年代における自動車愛好とは、現代と同様に、非生物的な機械という人工物に人間がひきつけられることなのであって、自動車には工業社会特有の魅力があった。不安定な時代においては、自動車は唯一の信用できる、正確に活動する、決して失望を与えることのない存在であった。若者は技術に熱中したが、それは準軍事的な趣味によることもあり、個人的な愛好心によることもあった。とにかく人間を孤独から救う神秘的な輝きが自動車に求められていた。同じような熱中が航空機とそのスピードに対してもいだかれたのである。

一九三七年の *Deutschland-Berichte* は「青年たちはナチスの理念によって、内面から生気を吹きこまれているのではない。彼らが熱中しているのはスポーツと技術なのだ。若いドイツ人はもはやバスの車掌や機関車の運転手になるとうとしない。彼らは航空士になろうとしている」(同誌、一九三七年六月号)、支配体制が変わった場合、たとえば戦争に敗れた場合には、「この種の若者たちは、内心で特別な困難を感じることなしに、新しい現実の上に立つに違いない。このことは確実に予想できよう」と同誌は指摘している。

独裁制が民衆を獲得できたのは、それがスポーツと技術だけでなく、広汎な休養と旅行の機会を民衆に提供できたからであった。ナチスのいうところによれば旅行はぜい沢ではなくて国民的な義務であり、休暇は精神的な更生をもたらすのであった。一九三七年にはドイツ旅行案内所は一千万人の旅行者を仲介した。外国人に対してもドイツを美

しい自然にめぐまれた国として紹介して彼らを招き寄せ、一九三八年だけで八三の国際会議がドイツ国内でもたれた。外国人の訪問客も以前の二倍に、彼らの宿泊日数はそれ以上に増加した。(一九三二年には二百万人、二六七、〇〇〇宿泊日。一九三七年には七百万人)。

ドイツ国内の観光地域としても、伝統的に有名であった北海やバルチック海の海水浴場だけでなく、バイエルン森(同州東方)、レーン山地(マイン河上流の北方)アイフェル山地(モーゼル河北方)が歓喜力行団の旅行コースに加えられた。外国旅行熱も高まって一九三八年には一八万人が巡航ツアーに参加した。ナチスの旅行団体と民間の旅行社とが競争して安い費用のコースを提供した。個人的な海外観光旅行も奨励され、地中海、アメリカ合衆国、などに休養、研究、訪問旅行が行われたが、団体旅行としてはサウザンプトン——シエルブル——ビゴ(スペイン西北)——ハバナ——マイアミ——ニュー・オルリンズまたはメキシコという「陽光コース」が好まれた。

ヒトラーが力を入れたのは、各自に独立した住宅をもたせる政策であり、集団住宅と並んで個人による住宅建築が奨励された。静かな牧歌的な住宅の庭で、世間から離れて、アヒル、鶏、ベビー、乳母車などに囲まれて休息する、というのがその理想であり、一〇、〇〇〇マルクから二四、〇〇〇マルクで、すなわち若いサラリーマンの一年間の収入内外で、比較的安く建てられるプランになっていた。

家庭生活や個人の持家への「退却」という生活態度は、「アメリカ式」家財道具や娯楽・休息用物資への欲求と結びついていた。一九三八年二月の自動車展示会に際して、ヒトラーはフォルクスワーゲン車の生産開始を公表したが、それに加えて消費物資の増産による生活の向上も約束した。彼が実際に目指していたのは軍需生産の増大であるが、彼は耐乏生活を説く代りに国民所得の増大を約束し、それに見合うだけの各種商品とくに日常生活用品の開発、即ち「すべての人々の生活をもっと楽しくすること」を約束した。しかしそんな約束が行われる前から、電気製品の大波

がすでに各家庭の主婦たちを襲っていたのである。電気かまどが開発され、電気コーヒーわかし、電気焼き網、料理用モーター、瞬間湯かし器、電気洗濯機、床みがき機、などがジーマンズ会社などによって売り出された。主婦向けの宣伝ではナチス当局は次のようにいていた。

「ドイツ的であれ、ということは手ぎわよくやれということである」「技術的進歩の時代、スポーツと保健体育、精神文化の時代には、ドイツの婦人たちは、家政の簡素化につとめる義務がある」と。自動食器洗い機の売行きはまだ限られていたが、工業界では一九三八年の前半期に五〇万個の電気冷蔵庫を売る目標を立てた。

一九三八年一〇月にはテレビ放送が一般化され、その受像機は公共の広間だけでなしに一般の家庭にも備えられるように計画された。フォルクスワーゲン車の計画と並んでテレビ受像機が一九三九年夏には一万個生産されることが告示された——もともと戦争がはじまったのでその実際の生産は、一九五二年にやっと再びはじまったが。

他方、戦争の始まる直前になると、余暇のための器具生産が驚ろくべき規模で増大した。ライカ・カメラはほとんど各戸に所有されるようになり、折たたみ式ボートが船外モーターつき、またはモーターなしで普及し、キャンピングカー、テント、キャンピングのための各種附属品、便利なピクニック用トランク、破れない皿、さびない食器が、ひろく利用された。キャンプ運動も盛んになり一九三八年には「テント場所案内」がドイツ自動車クラブによって発行され、一九三九年にはその増訂版が発行されて、オーストリア、ズデーテン地方のキャンプ場までが紹介された。キャンプ運動の発展は、民衆個人を一般大衆の中から引き離すだけでなく、近親者への責任感からも引き離す効果をもっていたことを忘れてはなるまい。「誰も自分のそばにはやって来ない、自分の好きなように食べ、冗談をいうことができる。食事のあとではゴロゴロ寝ていられるし、そばには木ややぶや水があるだけで、他人の捨てた文明のくずなどない、たとえば人々が私を救いようのない物質主義者とのしったとしても……」と、このグループの相談員たち

は宣伝している。ここに個人生活の自由と幸福とを求める民衆心理と、ナチス・イデオロギーの間の巨大な間隙を認めるべきである。

キャンピングカー運動は近代的な余暇利用運動であるが、ここに現われた独立自主への願望に連なるのが婦人のヌード礼賛である。近代技術の助けをかりて、人間生活の基本的欲求を自由に楽しみたいというのが、一九三〇年代の一般的な感情であった。

エロティシズムは第三帝国時代の人びとによってあけすけに楽しまれており、ヌードは決してタブーではなくなつた。ゲッベルスの検閲もヌードをはっきりと承認していた。またカーニバル期間のヌードや無礼講さわざも公認されていた。歓喜力行団の巡航船旅行がじつにエロティシズムの舞台になっていた。ドイツ労働戦線指導者ローベルト・ライは「ドイツの婦人はもっと美容術につとめなければならない」と要求した。一八歳から二一歳にかけての処女の団体「信仰と美」（ドイツ処女団所属）は、一九三八年に創設されたが、戦争のために端的形態のままで終ってしまった。そこでは美容法や近代社交ダンスが教え込まれ、また乗馬、テニス、暇な時の日光浴で身体之美をみかくこと、などが教科コースに入れられていた。ドイツ労働戦線の内部には美容術コースがあり、その出版物 *Sei schön und gepflegt* では眼のメイクアップ、パウダーの使い方、毛髪染めが教えられており、「（ゲルマン的な）ブロンドに染めないで金褐色に染めるようにすすめられていた。いろいろな色彩からなる海水着は単色化され、赤ぶどう酒色、こん色、黄金色が支配的となり」、肩のひもをのばして海水着を引下げ、日光がもっとよく肌にあたるようにした海水着が流行となった。

男子もまたキチンとヒゲをそり、歯をみがき、皮膚にはニヴェア・クリームをすり込んで美容につとめるようになった。これらの傾向が一九五〇年代の前半へとまっすぐに連なるのである。

現代ではナチス思想における民族的―人種的要素が現実からみて不当な形で強調されているが、漠然とした形のヨーロッパ理念もまた――戦争がはじまった後をなつても――実際には優勢であった。アデナウアー時代と同様に、第三帝国のもとでもいろいろな形のヨーロッパ統合（統一）が主張されていた。ボルシェヴィズムに対する防壁としての外国文化を擁護することが叫ばれ、一九五〇年代と同じく、ヨーロッパ理念と反ソビエト宣伝とが無反省に結合されていた。「ヨーロッパの自由を守り（ヨーロッパ内部の）兄弟戦争をやめること」が現在の戦争の目的であると宣伝され、「ドイツ以外の健全な民族に対して世界観的闘争をする積りはない」と説明された。したがって一九三九年にいたるまで、政府の支援する多数の国際交流がドイツで行われた。外国の新聞雑誌もひろく読まれていたし、外国放送をきくための番組紹介が、ドイツの番組紹介と並んで一般誌に掲載されていた。「外国人の生活態度を理解すれば、祖国をもっと意識的に愛するようになる」というのが対外交流の目的であった。

アメリカの映画はもつとも好まれており、マルレーネ・ディートリヒは、ナチス・ドイツをきらって帰国しない女優であるのに、その顔のクローズアップが、しばしば映画雑誌や大衆紙の表紙をかざった。アメリカニズム崇拜はワイマル共和制時代からの連続であつて、アメリカ映画の方がドイツ映画よりも人気があつた。外国為替節約のためにその輸入が制限されると、古いアメリカ映画の再上映が喜ばれた。人びとはそのなかに内的な解放感と一種の幸福感を見出していたのである。音楽でもアメリカのジャズ音楽、スウィング音楽は「ニグロ的で、ドイツ民族的ではない」としてナチス党から非難されていたにもかかわらず大流行で、若干のナチス党大管区指導者が、その上演やラジオ放送を禁止した場合もあつたが、実際は、いたる所で上演されていて、当局の禁止令は無視された。要するに第三帝国の下ではいろいろな生活様式が多彩に展開されていたのである。

以上によってシェーファーからの紹介を終わりたい。第三帝国の生活様式にも文化にも、その社会にもワイマル共和制からの連続性が強く認められた。したがってそこでは伝統的権威的社会と文化とがなお一方では維持されていたが、同時に他方では二〇世紀はじめらしいの大衆社会現象が、目覚しく発展し深化しつつあった。――再言すれば、大衆社会現象の深化は、ナチスによる統制と宣伝を徹底させる方向には作用せずに、その影響力を制約し、表面的なものにとどめる方向に作用した。伝統的権威は第三帝国の政策の結果、弱体化したが、そのあとには非政治化と個人生活への退却があらわれ、他方では放埒と混乱とが増大することとなった。要するに大衆社会現象は、ナチス権力の増大に寄与せずに、その弱体化に寄与したのである。

戦後西ドイツにおいては、プロイセンドイツ的な伝統社会とその文化とは、敗戦や東ドイツ割譲やドイツ民主共和国の成立によってその脊骨を折られている。しかしそこでは、大衆社会現象が深化しており、その点でナチス時代との間に一定の連続性が生まれている。ナチス時代は伝統的権威の衰退と大衆社会現象の発展という一種の過渡期を形成していた、といえるかも知れない。とにかくナチスは大衆社会現象の深刻化を阻止するための強硬政策をとらなかったし、阻止するだけの力ももっていなかった。

第三帝国いらい、すなわち一九三〇年代いらいのドイツ社会の連続性というテーマは、ニートハンマー、ポイケルト、シェーファーにみるごとく、一九七〇年代いらい展開された新しい研究テーマであり、その研究成果はやまとまとまりはじめたばかりの分野である。この派の研究者は第三帝国期をドイツ近現代史とヨーロッパ近現代史の連続性のなかでとらえており、ナチス支配を突然変異現象とは考えていない。

「ナチス体制と民主主義体制との間にある大きな相違を強調すべきである。ナチス体制の下においては民主主義体制に対して根本的な体制転換が行われた。この点を無視することは、誤りである」という各氏の批判に対して。

私は冒頭にのべたごとく、フリッツ・フィッシャーとともに「連続性と同一性とは同じではない。第三帝国と第二帝政ドイツとを比較すれば、その間には大きな相違が存在する。第二帝政は自由主義に基礎をおく法治国家であったし、第三帝国は法治国家ではなかった。法に背反する強制的追放や大量殺人が、ユダヤ人やポーランド人に対して行われた。第三帝国における犯罪的・非人間的性格は全く異常なものであった。しかしそれだからといって、第三帝国の特色を、この一面だけから眺めることは歴史的真実を許すべからざる形に刈り込んでしまうことを意味する。プロイセン・ドイツ国家を貫徹していた構造と戦争目的とを分析して、変化の中にある連続性と、それが国際的な体制に与えた影響とをしっかりと理解することこそが必要であらう」という見地に立つ⁽²³⁾。

ワイマル共和制と第三帝国との相違を私はもちろん、十分に認めている。そして民主主義と平和の方が、ファシズムと戦争よりも数倍も有難いことは身にしみて感じている。しかし、現実を歪め、連続性を無視して、両体制の相違だけを説くことは、政治的な宣伝行動であって、学問の研究ではない。両体制の相違は、あくまでも支配体制と民衆生活の連続性という枠の内でのみ認めるべきであらう。くり返すようであるが、ナチス体制は民衆をすみずみまで支配する力をもっていなかったし、体制自身が各種の支配集団の連合体であった。ナチス体制の成立は、「体制の根本的な変化」を、現実には伴っていなかったのである。この基本的な事実が私の批判者にはまだ納得されていないようである。

以上、実例をあげてここでのべてきたように、大衆社会現象の深刻化は、ナチス支配力を弱体化していた。この点の理解は私もこれまで十分ではなかった。フィッシャーの連続性テーゼに加えて、あらたに大衆社会現象による古い

権威的支配勢力の衰退、大衆の非政治化、家庭生活への退却、大衆消費と余暇享楽への没頭というテーゼを立てるべきであろう。「いつの間にかナチスになり、いつのまにかナチスでなくなった民衆」という指摘は、大衆社会現象や、実生活本位の民衆の態度からみてきわめて自然である。彼らはナチスを支持したがそれも条件づくりの支持であり、ナチズム信奉者になどなってはいなかったからである。彼らがたとえナチス黨員になっていたとしても、それは生活の方便のためであった。さらにナチス理論までが画一化されてはいなかった。

(二)の(C)

私の描くヒトラー像は「二〇年前に通用したヒトラー像にすぎない。著者のあげる数々の証拠こそ、ヒトラーの『カリスマ支配』の歴史的 content そのものである」という批判に対して。

私はヒトラー崇拜の現実の内容が、驚ろくほど実利的で、単純な英雄崇拜の一種と考えた方が真相に近いことを述べた。カリマス支配とは、このような崇拜心よりも、もっと宗教的熱狂心と奇蹟に対する信仰や期待が強いものであろう。私はヒトラー崇拜にはそのような要素が、非常に少なかったことを指摘し、大衆社会における民衆のさめた感情を強張したのである。私見は決して二〇年前に通用した「定説」と同じではない。

私は「民衆レベルには反ユダヤ主義がなかった」などと主張してはいない。昔ながらの反ユダヤ主義はなお厳存していたが、民衆は人種論的ユダヤ人絶滅論には同意しなかったことを指摘したのである。

(二)の(D)

戦後にいたるまでのドイツ史の展望の中でナチズムを理解しているのが、「西ドイツもまた帝国主義国家としてナ

チス期と連続性をもっているのではないか」「戦後の近代化、社会的公正化などの改革にはナチス期の体験が大きな影響を及ぼしているのではないか」などの議論であろう。私は大体においてこれらの指摘に対して賛成したい。ただし私は現代西ドイツにおける権威的家父長的軍団主義的反議会主義的伝統の残存の程度については、根本的にはフィッシャーの意見を支持する。ドイツ史の長い伝統が、西ドイツになって一気に消滅してしまうことはありえない。しかし西ドイツ帝国主義とナチス帝国主義との連続性は部分的でしかありえないであろう。敗戦および敗戦後における西ドイツの社会的経済的な変化はあまりに大きく、とくに農村の変化には根本的なものがあるからである。

最近西ドイツでは「ドイツの特殊な道」についての論議が行われている。私はドイツ社会の後進性は認めているが、しかしドイツ資本主義の強じんて柔軟な性格、しかもそれなりの近代化と急速な工業化、その開かれたダイナミックな性格を認める点でイリラーによるヴェーラー批判に賛成する。急速に前進する近代的なドイツと同国の後進的諸制度とは両方とも疑いえない現実である。イリラーとヴェーラーの主張の総合こそが必要ではあるまいか。⁽²⁴⁾

注

- (1) Vgl., Fritz Fischer, Bündnis der Eliten, Zur Kontinuität der Machtstrukturen in Deutschland 1871-1945, Droste, Düsseldorf 1979, S. 94f. 私見はフッシャーの意見を全面的に採用している。それに加えるべきものがあると思えば、後述の如く、第三帝国下における大衆社会化現象の深刻化とその一九五〇年代への連続の問題である。
- (2) 荒井信一「依然関心の高いワイマール時代」、朝日新聞、一〇月一〇日「読書」欄。
- (3) 西川正雄、週刊エコノミスト、九月二七日号、「読書」欄。
- (4) 「現代史サマーセミナー通信」(創刊号、一九八三・一〇・一)六頁以下。
- (5) 阪野智一、東京大学新聞、一九八三年九月二七日号、書評特集。
- (6) 西洋史学、一三〇号、一九八三年九月。

- (7) 山口定、「ファシズムと民衆」聖教新聞、一九八三年六月九日、「文化」欄。
- (8) 山口定、週刊ポスト、八月一二〜一九日合併号、「書評」欄。
- (9) 栗原優、週刊エコノミスト、七月五日号、「読書」欄。
- (10) 木村靖二、週刊読書人、六月二〇日号。
- (11) 石塚正英、立正史学、五四、一九八三年九月。
- (12) 岩淵達治、東京新聞、三月一八日、「書評」欄。
- (13) 清水多吉、毎日新聞、五月二日、「読書」欄。
- (14) 拙著『ナチス統治下の民衆生活』（東大出版会、一九八三年）三〇五頁、その他参照。
- (15) ゲルハルト・ケラー『占領下のパリ文化人』大久保敏彦訳、白水社、一九八三年を参照。なお注(20)にあげたシェーファー、一二六頁以下も参照。
- (16) Jürgen Kocka, Drittes Reich: Die Reihen fast Geschlossen, Was alltagsgeschichtliche Perspektiven bringen können, in: Die Zeit, Nr. 42. 14, Oktober 1983. この動向評のなかでコッカは近刊書五冊の書評を通じて、日常生活史からみたファシズム観を論じている。この貴重な動向評を精読する機会を与えて下さった相模女子大学非常勤講師佐藤健生氏に感謝した。
- (17) Lutz Niethammer (Hrsg.), Die Jahre weiß man nicht, wo man die heute hinsetzen soll, J. H. W. Dietz Nachf., Bonn 1983. Vgl. Kocka, in: ebenda.
- (18) Detlev Peukert, Volksgenossen und Gemeinschaftsfremde, Bund-Verl., Köln 1982. Vgl. Kocka, in: ebenda.
- (19) 拙著「第五章六」一二三八頁以下。
- (20) Hans Dieter Schäfer, Das gespaltene Bewußtsein, Deutsche Kultur und Lebenswirklichkeit 1933-1945, Carl Hanser Verl., 2 Aufl., München/Wien 1982.
- (21) Ders., Die nichtnationalsozialistische Literatur der jungen Generation im Dritten Reich, in: ebenda, S. 7ff.
- (22) Ders., Das gespaltene Bewußtsein, Über die Lebenswirklichkeit in Deutschland 1933-1945. in: ebenda, S. 114ff.
- (23) Fritz Fischer, a. a. O., S. 94f.

(24) 松本彰氏が一九八三年八月のドイツ現代史研究会合宿と、十一月の史学会大会で報告した。私見は上掲拙著、三二頁以下、四〇頁以下に部分的にのべている。ドイツ支配勢力の「救いようのない頑迷さ」だけでなしに、その強じんさと柔軟さを理解することなしには、一九四五年にいたるドイツ支配勢力の連続性の意義が理解できないであろう。フィッシャー・テーゼは、支配勢力の柔軟さと強じんさとともに、その頑迷さ、後進性をもつとも鋭く指摘しているのである。西ドイツにおける論者もイリー以下も、この点についてのフィッシャー・テーゼの長所を理解していないように見える。

なお第三帝国期の大衆社会現象については、拙稿「ナチズムと大衆社会現象」(思想、一九八四年二月号)でまとめてふれている。とくにシェーファーの所論は詳しく紹介した。またH・P・ブロイエル『ナチ・ドイツ、清潔な帝国』大島かおり訳、人文書院、一九八三年、はこの時代の性と社会における広汎な退廃現象や建前と現実の相違をよく描いている。ただしそこに一九五〇年代への部分的連続が存在することにはふれていない。